



巨大魔女王

登場人物

巨大魔女王：サティ

最後の相手：ヒズム

女王の部下：熊の化身と狼の化身
森の魔女、その他元国王や兵士と
殺された男達数名に村人達



昔々ある国で、一人の女が男に捨てられた。夫に捨てられたサデイと言う女は、美人でスタイルも良かったが、男の精液が好きで、夫となった男に毎日何回も射精を強要させたため、男の方は身体がもたず、命すら危ないと思いつた。サデイと別れたのだ。



マジかよ～

まだまだだよ

あゝ
もっダメだ

ウケ!

男尊女卑の時代、女は男からの要求が無ければ、結婚論のこともとすら出来ない。見た目は美しいサデイは、離婚してからも別の男からの求愛があつたが、どの男もサデイの強引な射精強要に死にかけて別れを選んだ。サデイと性交すると、殺されるかもしれない噂が立ち、最後は皆から性豪と言われる男が、挑戦する意味もありサデイに求愛した。しかしその男はサデイにまる一日精液を吸い取られ、心臓麻痺で死んでしまった。



わたしは魔女ではありません！
殿方の精液が好きだけなのです！

そんな～私はただ主人と、
子を宿す行為をしただけです。

煩い！大衆の前で股から脳天まで、
槍で串刺しにするから覚悟しておけ！

お前は夫を殺した罪で、
明日の死刑が決まった！

お前の様に男の精気を
吸い尽くす女は魔女だ！

あたしが死刑！？
串刺しにされるなんて嫌！

サデイは男から精気を吸い取る魔女呼ばわりされ、捕られられ
死刑を宣告された。
その時代は女が簡単に死刑にされてしまう様な時世であったが、
ギリシヤとか、火あぶりの刑とか、刑の種類はその時の国王の気分
で決まっていた。見せしめにと、全ての刑が公衆の面前で行われた。
スタイルの良かったサデイは、全裸状態での串刺しの刑が決まった。



お前はそんなに男の
エキスが欲しいのか!?

怪しい者では無い、
わしも昔この国から追われた者じゃ!

ええ、でも、追われている
身だし、もう無理です。

貴方は誰?

夜牢屋に入れられたサデイは、門番のスキを見て
夜中に牢屋を抜け出し、山の奥へと逃げ延びた。
サデイは本物の魔女が住んでいると言う噂の山の中を、
一晩中迷い歩いていると、明け方に怪しい女に出会った。
そしてその女は噂の魔女だつたのだ。
サデイは魔女に山奥に逃げてきた経緯を話し、自分は男の
エキスが大好きで、もう吸い取ることも出来ないなら死んだ方が
ましだと話した。すると魔女は、サデイに魔力を与えるから
力づくで奪い取れと言った。

この国を征服し、女王となって男達を全て自分の物にすれば、好きにだけ吸い取れると言う話だった。そして魔女が呪文を唱えたとサデイの体は3mを超える巨大な体になり、強靱な力が備えられた。魔力も備わり、サデイは巨大な本当の魔女に変貌したのだ。しかし、力があるだけでは一人でも千人も居る男の軍隊に勝てるはずが無いとサデイは思ったが、すると魔女はまた呪文を唱え始めた。



ロエムエッサイム



でもたった一人で、この国を征服なんて出来るハズが無いわ！



でも武器も持たずに
勝てるのかしら？



わくわくしい！
いつの間にか私の姿も…



これでどうじゃ！この者たちは全て、山の獣ともじゃ！
もともと人間をはるかに超えた力を持っている、
数万の軍隊でもこの女兵士達には勝てないだろう。

魔女は、山に住む動物の、熊や狼、虎や大蛇など猛獣達を
大きな女の姿に変え、あつという間に100人の女の戦士を
揃えたのだ。
そしてサデイも含め、その女達に兵士の服を纏わせ、
100人の巨大な女達の軍隊が作られたのだ。

いくら男達より大きな身体とは言え、武器も持たず、革のパンツと乳首には花びらをまとっただけの、殆ど裸の女達が、千人も居る男の兵士に勝てるのか？とは思ったが、サデイは死刑を宣告されている身でもう後は無いし、やるしかないと思った。

ありがとうございます。
必ずこの国の女王となり、
貴方をお迎えに参ります。

もう戦うしか無いわ！

わしのごとは良い！それより国の王と成った後は、暗殺を防ぐため何名か護衛兵として残すが良い。但し連れて行く戦士達は皆、元々人間の肉が好きで、猛獣だから時々男の肉を与える必要がある。やはりメスはオスが好きだからね〜
「」





あら美味しそう～
でも飲んでる場合じゃないわ！

ギャー

助けて～

怪物だ！
逃げろ～

ドスン

ドスン

スタスタ

そしてサデイは女の姿をした獣達の軍を率いて母国を攻めた。その時の男の平均身長は150cm程度しか無かったが、サデイは対し小さな兵達を捕まえては投げ飛ばし蹴散らした。サデイは化けた女兵士達は当然であるが、サデイも魔女が掛けた呪いにより、女兵士達は当分の間は優しさを失ってしまったため、相手の冷酷な女になってしまった。状態になっても、楽しいとさえ感じる。



は、ハイ

こちらペ〇スを
隠しちゃだめですよー



あ！
えく！？

それじゃ吸出し難いわね〜！
少し大きくしようかな…



今日から貴方は、
私の慰安扶として働くのよ！

さうぞー！
まずは裸に成りなさい！

わ、わたくしが
女王様の相手を…

千人の兵の中には女達に食い殺されてしまった者も居たが、大半は負傷を負いながらも生き残った。女王となったサデイはその中から、精液を吸い取る為に若い男を一人要求した。そして選ばれた男は、女王が他の男と間違え無い様に青い服を着させられた。男は巨大な女王の前で裸にさせられ、怯えてチンチンまで縮こまっていると、女王は魔法を使い、自分のサイズに合う様ペ〇スを大きくして勃起させた。そして山の魔女が言った通り、権力を使い男の精液を吸い取った。

しかし毎日出し続けていると、男の精液の出が悪く成ってくる。
女王は精子の出しが悪くなると来た男をそろそろ取替えようと考え、
その日は部下の二人を寝室に呼んでおいて、部下の前で男が
射精した精液を何時もの様に飲み込んでおいて、女王に休ませて欲しい
と男は毎日の大量射精で疲れきつており、女王に休ませて欲しい
と言ったが、女王はまた男のペニスを啜え込んだ。





今度は舐めたり吸ったりするのには無く、女王は牙を立て、
 ペ○スを根元から切り離されたペ○スを、噛み砕き飲み込んだ。
 女王は男の体から切り離されたペ○スを、痛みと悲しみで泣き叫ん
 でいると、部下の女兵士達が、男を掴み上げて噛み付き、
 更なる激痛で終に男は意識を失った。
 猛獣から変身した女達は人間、特にオスの臭いがする肉は
 好物だった。

ギャー

旨そう～

ブチ!

オブリ!

美味しい蜜を出す割りに、イマイチな味だわ・・・

ムンヤムンヤ

食べちゃダメ～



脂肪が付いて美味しそう～

ほら、この位のサイズなら十分だろう!?

この男を好きに使って良い!

でも人間の男のペ〇スでは物足りないです。

あ!これなら良いかも?

交尾の後は、あたし一人で食べちゃって良いの?

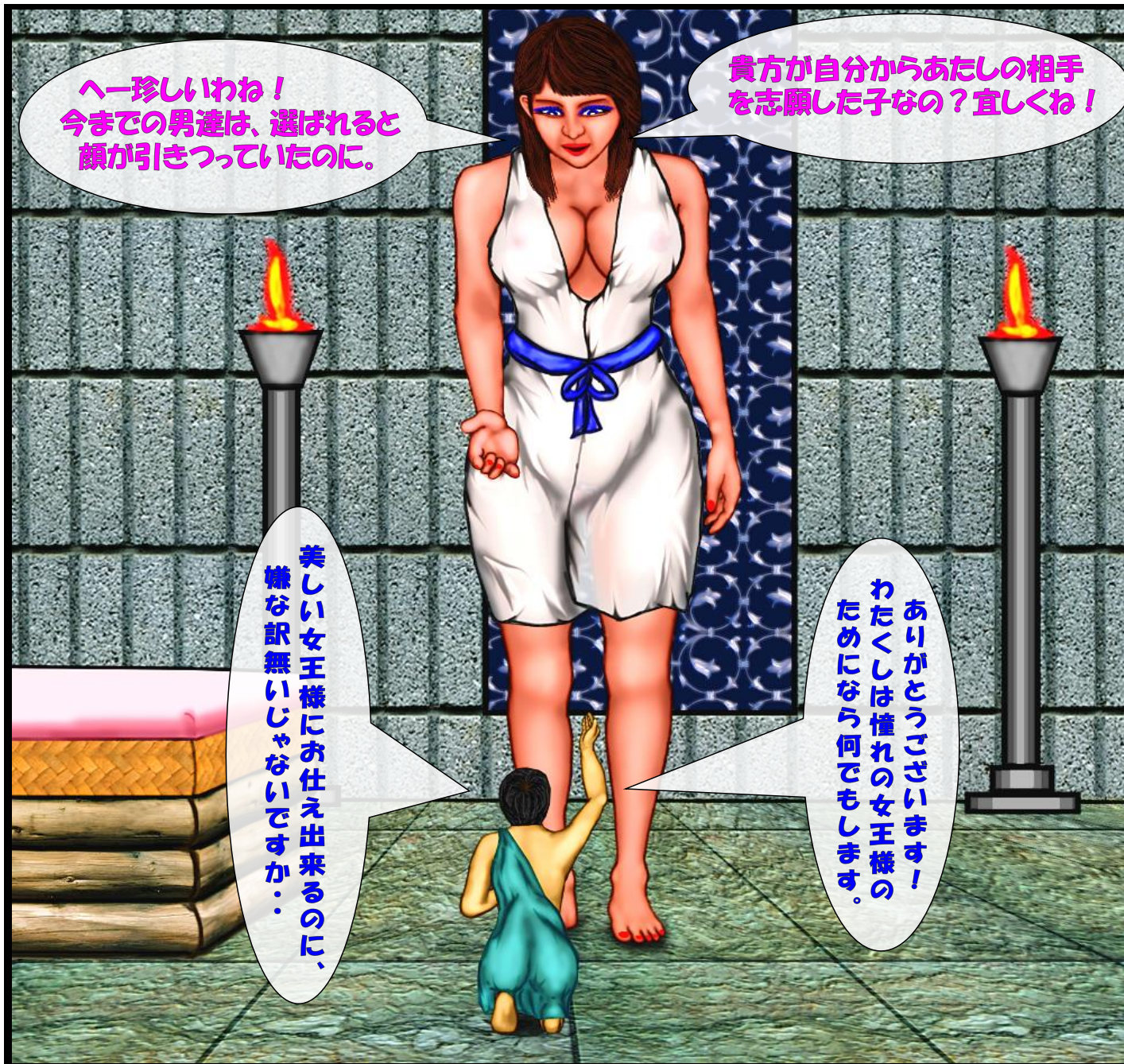
ええ勿論よ!

後で食べやすい様に、ハゲで肉付きが良い男を選んであげたよ!

これでくらいで満足してくれるかな?

ええ～
食べるなんてうざ～
ぞんざ～

女王の魔力でペ〇スを大きくされた男は、後ろ手を縛れて、恐ろしくて涙を浮かべていた。また部下が直ぐに交尾を出来る様、女王の相手をする男と同じ様に常時勃起した状態にされていた。



へー珍しいわね！
今までの男達は、選ばれると
顔が引きつっていたのに。

貴方が自分からあたしの相手
を志願した子なの？宜しくね！

美しい女王様にお仕え出来るのに、
嫌な訳無いじゃないですか・・・

ありがとうございます！
わたくしは憧れの女王様の
ためになう何でもします。

そして1年が過ぎた。
魔法でペオスを大きくして、今度の男が20人目となる時、女王の相手となつた男は、女王に憧れと好意の感情を持つてる、自分から志願したマゾ・ヒズムと言ふ時代、女王の淵は青く、唇は血の色をして、爪の色も赤く、まるで魔王住む魔女の様な風貌に加え、3mを超える巨大な体で、普通の男なら恐怖しか感じない。何れかもしヒズムはそんな怖ろしい女王が好きで、女王様の為になら何でもしてあげたいと言ふ変つた男だつた。



ヒズムは初めて大量の精液を射精したことであまり疲れすぎて、女王の女王の乳首を刺すことと、必死になつて舌や指を使い、女王の気持ち良いと言葉を聞いて安心し、眠ってしまった。女王の気持ち良い他の男も最初は疲れて寝てしまった。眠ってしまった者が多かったが、ヒズムは安堵感で寝てしまったのだ。



そんな中ヒズムは更に過激な要求を行った。
 女王はオシッコを飲ませてくれようとお願したのだ。
 しかしましの上にはその要求に「お願したのだ。」とせず、
 ヒズムも乗る体重で乗るとヒズムは諦め様としなかつた。
 50kgもある体乗るとヒズムが潰れてしまうので、
 全重は掛けたつもりで乗るとヒズムは諦め様としなかつた。
 取れない状態にしてもヒズムは諦め様としなかつた。

ヒズムと女王は昼も夜も一緒に楽しい時を過ごしていたが、
また一月が過ぎようとしていた。
そして女王と部下の女兵士が秘密の話をしている所を
ヒズムは聞いてしまった。

女王！またあの男のペ○スを食べ
ずに居たので、もう直ぐ一月が
過ぎて魔力を失ってしまいます！

そうね~そうするしか無いわ！
ヒズムは絶対に殺さない！

どうするんですか？
また他の男のペ○スを
食べるのですか？

そういう事だったのか！

女王は迷った。命を失って良いと思う程自分の事が好きだ
と言うヒズムに対し、裏切りでは無いが、他の男との行為を
しなくては成らない。
かと言って、このヒズムは絶対に殺したく無い。
しかし女王が選んだのは、ヒズムの方だった。

